

入院した子供に付き添う母親の不安 — STAI を用いた母親の不安と背景の関係による分析

2階東病棟

○時久三紀子・松本 由美

I. はじめに

近年、どの看護分野においても家族看護が重要となっている。特に小児看護においては、子供が家族の動揺や不安を敏感に感じとり反応するため、母親が精神的に安定した状態で子供に接することが大切であり、より家族看護の重要性を実感している。

子供が入院する時の母親の不安は、患児に関する事、他の家族に関する事など様々であり、当病棟でも子供に付き添っている母親からいろいろな相談を受けることがある。

入院した子供に付き添う母親の不安は、母親をとりまく様々な環境に影響されると考え、今回は母親の背景を中心として、入院した子供に付き添う母親の不安に影響を及ぼす要因を明らかにするため本研究を行った。

II. 研究方法

1. 調査期間：平成5年6月～平成6年7月および、平成7年2月～平成8年4月
2. 対象：当病棟に入院した0歳から16歳までの子供に付添った母親107名
3. 方法：調査用紙は、研究の目的、調査に協力の有無や回答内容が今後の治療や看護には全く影響しないこと等を説明し、同意が得られた117名に対し入院の翌日に配布した。回収数は107名(91.5%)であった。
4. 調査内容：母親の背景を知るための質問用紙、関学版 STAI 質問紙(1)(2)を使用した。調査項目としては、母親の年齢、子供の本院への入院経験の有無、母親の職業の有無、父親との同居の有無、日常の家事・育児の状況、母親不在時の家事・育児の状況、付き添い交代者の有無を調査した。

III. 結果

1. 対象者の背景

母親の年齢は33.3(±5.5)歳で、職業では50人が専業主婦で、フルタイムで働いている人は31人であった。また患児の年齢は、52.1±478ヶ月、4.3歳であった。

患児を含めた子供数の平均は 2.1 ± 0.8 人であった。一人っ子が 21 人、患児の他にも子供がいる人が 78 人であった。

同居者については 80 人が核家族で、核家族以外の同居者がいる人は 18 人であった。核家族以外の同居者がいる 18 人のうち 15 人が父方の祖父母、3 人が母方の祖父母との同居であった。また、107 人中 6 人が父親とは別居していた。

日常、家事を母親が行っているのは 91 人で、そのうち 86 人は母親が不在の時の交代者があった。育児についても、日常は母親が担当しているのは 87 人で、そのうちの 66 人は母親が不在の時の交代者があった。付き添いについては、交代者が有る人が 68 人、無い人が 23 人であった。

2. 検定結果について

特性不安得点は平均 48.1 ± 9.3 点、状態不安得点は平均 52.2 ± 8.0 点であった。特性不安得点と状態不安得点では $r = 0.549$ でかなりの相関が認められた。

母親の背景として子供の本院への入院経験の有無、母親の職業の有無、父親との同居の有無、日常の家事・育児の状況、母親不在時の家事・育児の交代者の有無、付き添い交代者の有無等を調査したが、これらでは状態不安得点に有意な差は認められなかった。

核家族以外の同居者の有無による状態不安得点の比較と、同居者の種類による状態不安得点の比較では、核家族以外の同居者が有る人が 56.0 点、無い人が 51.3 点で、核家族以外の同居者が有る人のほうが有意に状態不安得点が高くなっている。

また、状態不安得点を同居者の種類により比較したところ、父方の祖父母の同居が有る人が 57.3 点、母方の祖父母の同居がある人が 49.7 点、全く同居が無い人が 51.3 点で、父方の祖父母と同居している人が母方の祖父母と同居している人に比べて有意に状態不安得点が高くなっていた。

IV. 考察

今回私たちは、入院した子供に付き添う母親の不安に影響を及ぼす要因を明らかにするためにこの研究に取り組んだ。特性不安が高い人でも、ある状態ではほとんど不安を感じない場合もあるが、特性不安得点と状態不安得点ではかなりの相関が認められたことから、母親が入院した子供に付き添うという状況では、日頃不安に陥りやすい人ほど不安が強くなるということが言える。

入院した子供に付き添う母親の不安と、本院への入院経験の有無、母親の職業の有無、父親との同居の有無、母親不在時の家事・育児の交代者の有無、付き添い交代者の有無では関連性は認められなかった。入院した子供に付き添う母親の不安は、入院経験の有

無ではなくその時の患児の状態が大きく影響すると思われる。母親不在時の家事や育児の交代者の有無による比較では、交代者がいない人が家事では3人、育児では2人であり、ほとんどの対象者に交代者があったため、交代者がいないことがあまり問題にならなかったのではないかとと思われる。

核家族以外の同居者の有無と種類の比較では、同居者の無い人が有る人よりも状態不安得点が高いと考えていたが、検定結果は逆であった。現代の家族には、個人化現症が見られており、家族の維持継続という課題よりも、個人の欲求を優先させる傾向にある。同居することは、家事や育児等の援助が得られ様々な利点もあるが、気兼ねや遠慮も多くある。家事や育児に対する意見の違いを、自分たちの生活への干渉ととらえる場合もあり、同居者がいない方が自由な生活ができると考えるのではないだろうか。また父方の祖父母と同居している人の方が、母方の祖父母と同居している人に比べて、状態不安得点が高かったこともあわせて考えると、ある程度自分のわがままや無理が言いやすい母方の祖父母との同居が、母親にとって一番安心できる環境であると考えられる。

V. 結論

今回の研究により、

1. 日頃不安に陥りやすい母親ほど、入院した子供に付き添う時の不安が強い。
2. 子供の本院への入院経験の有無、母親の職業の有無、父親との同居の有無、母親不在時の家事や育児の交代者の有無、付き添い交代者の有無は、入院した子供に付き添う母親の不安の強さに関連性はない。
3. 核家族以外の同居者がいるかいないかは、入院した子供に付き添う母親の不安の強さに関係があり、核家族以外の同居者がいるほうが母親の不安が強い。
4. 同居者の種類も入院した子供に付き添う母親の不安の強さに関連があり、父方の祖父母と同居している母親が、母方の祖父母と同居している母親よりも不安が強い。という4点が明らかになった。

以上の結果をもとに母親の性格傾向や家族構成を理解した上で、母親が子供の入院という不安な状態の中でも心の安定を保ち、子供の治療や看護に参加できるように取り組んでいきたいと思う。

平成9年9月13日～14日、名古屋市にて開催の日本家族看護学会
第4回学術集会で発表